

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 3 3	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Alcohol use, physical performance, and functional limitations in older men. 高齢男性における飲酒と身体能力と機能について	
執筆者	
Cawthon PM, Fink HA, Barrett-Connor E, Cauley JA, Dam TT, Lewis CE, Marshall LM, Orwoll ES, Cummings SR; for the Osteoporotic Fractures in Men Research Group.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Am Geriatr Soc. 2007 Feb;55(2):212-20.	
キーワード	
アルコール、手段的日常生活動作 (IADL)、身体機能、CAGE 質問紙、身体能力	
要 旨	
目的: 高齢男性における飲酒状況、身体活動、機能制限の関係について調べる。	
方法: アメリカの6つの病院で65歳以上の男性5,962人を対象に断面調査を行った。身体機能を問うアンケート、CAGE質問紙(2点以上を問題飲酒歴とした)、日々の過剰飲酒の有無(最も多い日で一日に5杯以上)について調べた。さらに週の飲酒量により次のように分類した。0杯=節制家、2,116人;1杯未満=機会飲酒、739人;1杯以上7杯未満=少量飲酒、1,563人;7杯以上14杯未満=中等量飲酒下位層、848人;14杯以上21杯未満=中等量飲酒上位層、459人;21杯以上=大量飲酒、237人。握力、足の力、椅子から立つ動作、歩行の状況を通常の診察時に調べた。	
結果: 年齢を調整すると、中等量下位層と中等量上位層で3~5パーセント節制家より身体能力が高く、大量飲酒者は節制家と同程度であった。多変量調整を行うと関連は小さくなるもののなお有意であった。中等量下位層がIADL制限に関しては最もオッズが小さく、節制家に対して、オッズ比(OR)=0.52、95%信頼区間(95%CI)=0.39-0.69であり、中等量上位・大量飲酒層に対しても同様のオッズ比であった。飲酒量と自己報告による機能制限とはU字型の関係みられ、最もオッズの高い節制家をオッズ比=1.0とすると、大量飲酒層OR=0.88,95%CI=0.58-1.36、最もオッズの低い中等量下位層でOR=0.62,95%CI=0.46-0.95であった。	
結論: 高齢男性においては、適量飲酒は身体能力とやや正の関連が見られ、機能制限のオッズが低かった。	